
DROWN

コルレオーネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DROWN

【著者名】

コルレオーネ

【あらすじ】

とても悲しい夢を見た。そして、そこから始まった。

風鈴の音が聞こえる。

チリンチリンと涼しげな音を立てながら、風鈴は風に揺られている。薄いブルーの硝子に、真っ赤な夕日の光が透けて見える。色彩のコントラストが美しい。その様子はとても物悲しく感じた。

辺り一面は砂だらけだ。砂漠だらうか、それとも砂浜だらうか。空にはたくさんの鳥が「の字に列なつて飛んでいる。何処へ行くのだろつか。やがて鳥達は雲に隠れて見えなくなつた。

手に持つていた風鈴を思い切り空に投げる。風鈴は相変わらず涼しげな音を立てながら、放物線を描いて飛んでいく。豆粒ほどの大きさになり、落下を始めたあたりで見失つた。しかし、チリンチリンと風鈴の音は鳴り続いている。

やがて、風鈴の音も消えた。すると、僕はだんだん寂しくなつた。なぜだかは解らないが、寂しいのだ。

なんだか寂しい…
なんだか寂しい…
なんだか寂しい…

夕日はどんどん地平線に消えていく。蜃気楼のせいいか夕日はゆらゆらと揺れて見えた。ゆらりゆらり、それが僕にはなんだか夕日が溺れているよつに見えた。地平線に沈まないよう懸命にもがいているようだ。

トンボがたくさん飛んでいる。あちこちに、じゅぢゅに、向こ

うのトンボはアベックだろうか、尾っぽをくつつけながら飛んでいる。トンボ達はそれぞれが好きなように飛び、ときどき疲れたのか、地面の上で羽を休める。僕の頭や肩なんかにも止まりうます。

そして、夕日は完全に沈んだ、辺りは闇と静寂に包まれた。何も見えない。次に太陽が昇るのはいつだろうか、もう一度と太陽を見ることは無いような気がした。僕は一層、寂しい気持ちが強くなつた。

さよなら太陽。

さよなら鳥達。

さよならトンボ達。

喉の渴きで、圭介は目が覚めた。

辺りはまだ真っ暗だ。身体を反転し、枕元の目覚まし時計を見た。時計の針は、ぼんやりと光を帯びて闇の中に浮かんでいる。螢光塗料のせいだろう。時刻は午前3時を刻んでいた。寝ぼけたまま身体を起こす、身体は鉛のように重たい。全身は水を被ったように汗びたしだ。汗で張り付くTシャツが鬱陶しい。

圭介は、びしょ濡れのTシャツを脱ぎ捨て、側にあつたハンドタオルで体を拭いた。その夜は特に暑くは無かつたのだが、圭介の身体はかなり熱を持っていた。

汗を拭き終えると、ハンドタオルを肩に掛け、洗面所へ向かう。闇の中を手探りで進んでいると、圭介は何かを蹴飛ばした。何かが倒れるような大きな音、圭介はすぐにそれがゴミ箱だと判つた。散乱したゴミをイメージして、電気のスイッチに手を掛けたが、喉の渴きには勝てず、そのまま直さず洗面所へ向かった。

蛇口を最大限まで捻る、勢いよく拭き出る水、圭介は直接口をつけ、むしやぶりつくように水を飲んだ。渴いた喉に冷たい水が流れ込んでくる。少し塩素臭いが、そんな事は言つていられない。圭介は貪欲に水を飲み続けた。

ようやく飲み終えると、今度は頭から水を被つた。冷たい水が眠気を洗い流していく。手に水を溜め、顔を洗うと、圭介は蛇口を止めた。肩に掛けたタオルでゴシゴシと顔と頭を拭ぐ。もうすっかり目が覚めた。

圭介は半裸のままベランダに出た。冷たい風が圭介の肌をなぞり、熱を持つ身体を冷ましていく。圭介は手摺りに背中からもたれ掛かつた。そして、煙草を一本取り出し、口にくわえる。しかし、風が思ったより強く、なかなかライターの火が着かない。圭介は煙草

を吸うのを諦め、くわえていた煙草を箱の中へ戻した。

圭介は煙草をズボンのポケットにしまうと、今度は前から手摺りにもたれ掛かり、マンションの11階からの夜景を眺めた。光の河のように流れている車のライト、雲の間から顔を覗かせる丸い月、遠くの空では航空機のライトが点滅しながら横切つて行く。

圭介は先程見た夢の事を考えていた。もうあまり覚えていなかつたが、その夢の事を考えると、身が擦り切れるように悲しく、そして、なにか恐ろしい物に追われるような、とても不安な気持ちになつた。きつと疲れてるんだ、もう忘れよう。圭介はそう自分に言い聞かせ、もう一度眠る為に、部屋の中に入った。圭介の中で、何かが変わり始めていた。

電話の呼出し音がけたたましく鳴り響く。

圭介は受話器を取り、マニュアル通りの応対をする。顔も見えない相手に、言葉を選びながらストレスの溜まるやりとりを続ける。圭介は心中で悲鳴を上げていた。電話の用件が済み、ホッと胸を撫で下ろし受話器を置く。しかし、また直ぐに呼び出し音が鳴り出した。忙しい時間帯は、片時も電話の傍を離れる事ができない。

これが、圭介の日常だった。入社してまだ2ヶ月、接客と下回りは新入りの役目だ。嫌いな上司に気を遣い、自分でも嫌になる程の腰の低さで、顧客に接しなければならない。もちろん電話の応対も新人の役目だ。圭介は自分の進んだ道を後悔し始めていた。

初めは誰でも痛感する事だ。と、言つてしまつてはそれまでなのが、今の圭介にはその事を素直に聞き入れる余裕が無かつた。慣れない環境、上司の叱咤、失敗を恐れる故のプレッシャー、練習より実践に重みを置く教育方法など、それらが圭介の心を摩耗していく。また、2ヶ月というのも微妙な時期で、この時期になると、上司からは叱られる事はあっても褒められる事は無い。仕事を上手くこなしても、それが当たり前だと思っているのだろう。圭介が望まずとも、上司への殺意らしきものが込み上げてくる。それくらい今の圭介は荒んでいた。

「吉田、俺が代わるから、五番行つてきていいぞ。」

上司が、空気に向かつて何度も頭を下げている圭介に言つた。圭介は上司を見た。頭の前部分がかなり薄くなつてきている。じきに見事なMの字に禿上がるだろう。世間から見れば、日本人の平均的な顔立ちをしているのだろうが、圭介の目にはとても人相が悪く映る。圭介は上司の言葉を聞き、心中で躍起した。五番とは会社用語で昼休みの事だ。つかの間だが、ようやく休息できる、圭介は電話の相手に上司と代わる事を告げ、喜びを悟られなにように受話器を上

司に差し出そうとする。

しかし、なかなか手が前に出ていかない。受話器を渡そうとしても上手く渡せないのだ。上司は怪訝そうな顔をして圭介の顔を見る。そして、圭介は自分の異変に気付いた。肘から先が全く動いていないのだ。圭介の感覚では肘は伸びている筈なのに、受話器を持つた手はいつまでも圭介の耳元に張り付いている。

圭介が自分の体の操縦にてこずつっている間に、じれったくなつたのか、上司が圭介から受話器を無理矢理引つたくつた。そして、一回軽く咳ばらいをすると、受話器に向かつて話し始めた。

「大変お待たせいたしました。社の者が失礼致しまして、申し訳ございませんでした。」

まるで、あたかも圭介が何か失礼な事を言つたかのような言い草だ。圭介は手の違和感の事などすっかり忘れて、露骨に不快感を顔に出す。幸い上司は電話に気をとられ、圭介の表情には気付かなかつた。圭介は休憩室へ向かつた。他の社員が仕事に追われている中で自分が休憩に入る時が、圭介は好きだつた。気が付くと手の違和感は消えている。休憩のせいで浮かれていた圭介は、この違和感を大して危惧をしていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685a/>

DROWN

2010年10月10日02時59分発行